

小中一貫教育の成果と課題

1 小中一貫教育による成果

(1) 先進校、先進自治体、文部科学省等調査より

① 学習・学力面

- ・ 中学進学時のストレスが大幅に軽減されて環境の変化への不安がなくなった結果として「勉強が楽になった」の
声が多い
- ・ 学習意欲の向上が見られる
- ・ 授業の理解度の向上が見られる
- ・ 学習習慣が定着している
- ・ 9年間の長期的スパンで教育を行えている
- ・ 小学校で定着しきれなかった内容を中学校で補える
- ・ 子どもに合わせて独自のカリキュラム編成が可能になった
- ・ 独自の取り組みを編成しやすい

② 生活面・学校生活への順応

- ・ 小中の交流が日常的にあることで、小学校から中学校への変化が緩やか
- ・ 中1ギャップを感じにくくなる
- ・ 日頃から幅広い年齢層での交流ができる
- ・ 学校生活でのストレスが軽減することで、いじめ、不登校が減少する
- ・ 児童生徒に思いやりや助け合いの気持ちが育まれる
- ・ 上級生が下級生の手本となろうとする意識が高まる
- ・ 下級生に上級生に対する憧れの気持ちが強まる
- ・ 中学校への進学に不安を覚える児童が減る
- ・ 自己肯定感、自己効用感が向上する

③ 特別支援教育における成果

- ・ 9年間、同じ先生で子どもも保護者も安心する
- ・ 特別な支援の必要な子どもに対する9年間一貫した対応が子どもの良さを伸ばす。
- ・ 長期的に成長が確認できてより効果的な支援を生み出せる
- ・ 長いスパンで関わることで子どもの特性と適切な支援の方法が分かる
- ・ 保護者と長い目で子どもを見ながら、支援方法の共有や連携ができる

④教員の学習指導・生活指導に関する成果

- ・小中の教職員同士、互いの良さを取り入れ、協力意識が高まる中で指導力が上がる
- ・9年間の長期的スパンで教育を行っている
- ・小学校で定着しきれなかった内容を中学校で補える
- ・子どもに合わせた独自のカリキュラム編成が可能になった
- ・同じ生徒を長いスパンで見られるので教職員の指導への対応力が上がる
- ・子どもの特質(多様性)の理解が深まり、子どもに合った対応が継続できる
- ・不登校、いじめ、暴力行為等の減少で生徒指導の問題が減り、負担が減少している
- ・「指導すること」より「感じ取ること」「見ること」による教育効果が高い

(2)文部科学省「小中一貫した教育課程の編成・実施等に関する事例集 第2版」2022年2月より

① 認知能力、非認知能力両面から基礎的な素養を身に付けることができる

小学校教員の全人教育ができる良さ、中学校教員の教科指導ができる良さを双方に取り入れ、互いに補い合い、小学校高学年で両方の良さを活かした移行期間を設けることにより、義務教育9年間で小中両方の教員で全人教育を行いながら、基礎学力の定着を図ることができる。例えば、新田学園で9年間育った現9年生は、今年度の全国学力調査(数学)において上位の成績を収める結果となった。

- ② 特に、非認知能力という点では、小学校高学年が中学生の姿を見て学べる、ロールモデルが近くにいる、という点が大きくプラスに働いている。例えば、中学校3年生が体育祭などで発揮する、努力したからこそ得られた強さ、速さなどは、小学校の児童にとっては、「憧れ」「こうなりたい」と思うきっかけになる。教員がどんなに教室で情報として伝達するよりも心に響く、内在的な動機となって、「学び」につながっている。

(①②足立区立新田学園)

- ③ 1年生に入学したときから9年生の姿を目標にし、9年生は1年生を優しく導いていく。様々な年齢層から成り立つ社会にあって、学校も決して例外ではない。思春期と言われる多感な時期だからこそ、連続した学びや人間関係が求められると考える。

- ④小学校教諭、中学校教諭という意識を、義務教育9年間の教諭であるという教員の意識改革をし、子供たちの発達段階に即した指導ができた時に、教員の力量が向上し、子供たちに大いに還元される。

(③④北秋田市教育委員会教育長 佐藤昭洋)

2 小中一貫教育の課題

(1)先進校、先進自治体、文部科学省等調査より

人間関係

- ・9年間、ほぼ同じメンバーで過ごすので、集団に合わない場合に環境を変えにくい
- ・9年間同じ人間関係が続く中でいじめがあった場合に悪化するケースもある。
- ・小学校と中学校の境目がなくなり、新たな気持ちの切り替えや進学する充実感がなくなる可能性がある。
- ・小学生が中学生を怖がってしまうのではないか。